

菱山 湧人

(日本学術振興会特別研究員 PD/新潟大学)

要旨

チュヴァシ語の部分構造をめぐっては、2つの興味深い現象が観察される。

- ① 上位集合を表わす名詞句が奪格、属格、主格のいずれかで標示されうる (例: {*věsenčen/věsen/věsem*} *itlaraxășě* 「彼らのうち/彼らの/彼らは」 過半数が)。
- ② 定形動詞との一致では単数一致も複数一致も起こりうる (例: *saxalășě pěl{-et}'-eššě* [知る{-現在 3単/-現在 3複}] 「彼らの少数が知っている」)。

これらの現象について記述した先行研究は管見の限り見当たらない。本研究ではコーパスを用いた定量的調査の結果をもとに以下の3点を主張する。

- ① 上位集合名詞句は奪格形が最も一般的で、次に主格形が多く、属格形は稀である。属格形は残存の可能性があり、上位集合名詞句が話題の場合は主格形となる。
- ② 上位集合名詞句が主格形の場合は専ら複数一致が起こる。よって、主格形の上位集合名詞句が現れる場合はそれが定形動詞と一致を起こす蓋然性が高い。
- ③ それ以外の場合は、代名詞化した限定詞の意味的な複数性が高いほど複数一致の頻度が高い。よって、部分構造と定形動詞の間には意味的一致が起こりうる。

1. はじめに

本研究¹は、チュヴァシ語 (チュルク諸語オグル語群) の部分構造 (partitive construction) に関する2つの現象、すなわち「上位集合を表わす名詞句の格標示」および「部分構造と定形動詞の間の数の一致」を対象とする。本研究で扱う部分構造は、上位集合を表わす名詞句 (任意) と、下位集合を表わす代名詞化した限定詞 (pronominalized determiners)² からなる名詞句である (例: (*věsenčen*) *numayășě* 「彼らのうち多く」)。主なものを以下の表1に挙げる。

表1: チュヴァシ語の主な代名詞化した限定詞

<i>numay-ășě</i>	彼らの多く	<i>saxal-ășě</i>	彼らの少数
<i>čilay-ășě</i>	彼らのかなり	<i>xăș-ě+pěr-i</i>	彼らの一部
<i>itlarax-ășě</i>	彼らの過半数	<i>kašniy-ě</i>	彼らのそれぞれ

これらに加えて、数詞に基づくもの (例: *ikk-ěšě* 「彼らの2人」、*višš-ěšě* 「彼らの3人」) もある。いずれも末尾に3人称所有接辞を持ち、一部を除いて特殊な形式 *-Ăšě* が付加する。この形式はこれらの限定詞のほか、一部の親族名称のみに現れる非生産的な形式である (例: *pičč-ěšě* 「彼の兄」、*app-ășě* 「彼

¹ 本研究は JSPS 科研費 (研究課題 23KJ1014) の助成を受けている。

² トルコ語に関する先行研究 Göksel and Kerslake (2005: 120) の用語であり、限定詞に所有接辞が付いて代名詞的に機能する語を指す (例: *hiçbir-imiz* [none-1PL.POSS] 「私たちの誰も」、*bazı-lar-ımız* [some-PL-2PL.POSS] 「君たちの一部」)。以下、本発表で扱うチュヴァシ語の類似形式も「代名詞化した限定詞」と呼ぶ。

の姉)。また、上述の主に3人称を上位集合とするもの³のほかに、1・2人称複数のみを上位集合とするもの (*pur*「全ての」に基づく *pursāmār*「私たち全員」、*pursār*「君たち全員」や、数詞に基づく *iksēmēr*「私たちのうち2人」、*iksēr*「君たちのうち2人」など)もある。チュヴァシ語の部分構造(特に表1に挙げた形式を含むもの)をめぐっては、2つの興味深い現象が観察される。

① 上位集合を表わす名詞句が奪格、属格、主格のいずれかで標示されうる

上位集合を表わす名詞句が明示される場合、奪格で標示される例が多いが、属格や主格で標示される例も見られる。主格で標示される場合は、代名詞化した限定詞とともに二重主語を構成するように見える(例: {*věsenčēn/věsen/věsem*} *ūtlaraxāšē* 「{彼らのうち/彼らの/彼らは} 過半数が」)。

② 定形動詞との一致では単数一致も複数一致も起こりうる

チュヴァシ語では主語と定形動詞の間で人称・数の一致が見られる。基本的に、主語が文法的に単数の場合に定形動詞は単数形に(単数一致)、複数の場合は複数形になる(複数一致)⁴。部分構造が主語の場合は、単数一致も複数一致も起こりうる(例: *saxal-āšē pēl{-et'/-ešē}* [少ない-3.POSS 知る{-PRS.3SG/-PRS.3PL}]「彼らのうち少数が知っている」)。

チュヴァシ語におけるこれらの現象について記述した先行研究は管見の限り見当たらない。また、チュルク諸語で最も研究の進んでいるトルコ語に関する先行研究の記述を援用しても、これらの現象を説明することはできない(第2節で後述)。本研究はコーパスを用いた定量的調査により、上位集合を表わす名詞句の3つの格標示の頻度、単数一致と複数一致の頻度、それら2つの相関の有無を明らかにし、それらを手掛かりにこれらの現象を説明することを目的とする。

本発表の構成は次の通りである。まず第2節でトルコ語に関する先行研究の記述をまとめる。次に第3節で調査方法と調査結果を挙げ、考察を行う。最後に第4節で本発表の内容をまとめ、今後の課題を挙げる。

なお、特にことわりのない限り外国語文献の翻訳、例文・表番号、ラテン文字転写⁵、グロス、日本語訳、文字飾り等は発表者による。

2. 先行研究

本節では、チュヴァシ語と同じくチュルク諸語に属し、研究の進んでいるトルコ語に関する先行研究 Göksel and Kerslake (2005) および Aydın (2009) の記述をまとめ、問題提起を行う。なお、トルコ語はチュヴァシ語とは異なり、定形節において明示的な3人称単数標識を持たず、3人称複数標識は主語が文法的に複数であっても義務的ではない。

Göksel and Kerslake (2005: 164-168) によると、3人称所有接辞で標示された部分構造において、修飾語は奪格もしくは属格で標示される(例: *komşu-lar-ımız{-dan/-ın} bazı-sı* [neighbour-PL-1PL.POSS{-ABL/-GEN}]

³ まれにこれらが1・2人称複数を上位集合とする場合がある。

⁴ 複数形の名詞句が主語の場合は複数一致が起こる。単数形の場合は基本的に単数一致が起こるが、本発表で扱う部分構造や数量詞に限定された名詞句のように、指示対象が複数であるものが主語の場合は複数一致が起こる場合もある。

⁵ 例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。

some-3.POSS]「私たちの隣人の一部」)。これらは多くの場合交換可能であるが、属格による構造は割合や全体性など、奪格標示された修飾語では表せない関係を表わすことができるという(例: *dergi-ler-in hepsi-ni* [magazine-PL-GEN all-3.POSS-ACC]「雑誌全部を」)。Göksel and Kerslake (2005: 120) によると、1) 包括的な集団を指す *hepsi*「彼ら全員」が主語の場合は、述語が人称標識なしとなるのが最も一般的であるが、3人称複数標識が現れる場合もある、2) *bazısı, bazıları / kimisi, kimileri*「彼らの一部」が主語の場合は述語に複数標識の現れない形式が好まれる、3) *hiçbiri*「彼らの誰も(…ない)」が主語の場合は述語が決して複数標示されない。

Aydın (2009: 99) は代名詞の空範疇 *pro* を仮定し、これが主語の部分数量詞を含む主語名詞句内に留まっている場合は単数一致が起き (1a)、そこから時制句の指定部に移動している場合は複数一致が起こる (1b) と説明している。その証拠として Aydın (2009: 99) は、単数一致では主格主語が許容されず、複数一致では属格主語が許容されないことを挙げている。

- (1) a. [TP [NP *pro* kaç-ımız] on-u haklı bul-uyor-Ø]?
 how.many-2PL.NOM he-ACC right find-PRS-3SG
- b. [TP *pro*_i [TP [NP *t*_i kaç-ımız] on-u haklı bul-uyor-sunuz]]?
 how.many-2PL.NOM he-ACC right find-PRS-2PL
- ‘How many of you think that he is right?’

一方チュヴァシ語の部分構造では、上位集合を表わす名詞句が属格標示される例はあまり見られないように感じられ、主格形が現れている例も見られる。また、単数一致で主格名詞句が現れる場合 (7) も、複数一致で斜格名詞句が現れる場合 (3) もある。よって、トルコ語の先行研究の記述を援用してもチュヴァシ語における当該現象は説明できない。

3. 調査と考察

本節では 2.1 節で調査方法について述べ、2.2 節で調査結果を挙げ、考察を行う。

3.1. 調査方法

チュヴァシ語のオンラインコーパス Čavaš čelxin ikčelkellě šupsı (チュヴァシ語 2 言語コーパス)⁶ を用いて、次の手順で調査を行った。まず、表 1 に挙げた 6 つの代名詞化した限定詞を含む部分構造 (それぞれ上限を 200 例として抽出⁷) を対象に、上位集合を表わす名詞句の 3 つの格標示の頻度と、単数一致と複数一致の頻度を調べた (前者は上位集合を表わす名詞句が明示されている例が、後者は述語が定形動詞である例が集計対象)。次に、これらの結果をもとに上位集合を表わす名詞句の有無と格標示別の単数一致と複数一致の頻度を調べた。

⁶ 総語数約 1452 万語 (2023 年 3 月 29 日現在) のタグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。検索窓は一つのみ。2023 年 3 月現在、リアルタイムで更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。本稿で出典の明記されていない例は、本コーパスから抽出されたものである。

⁷ *ülaraxšě*「彼らの過半数」が 140 例、*saxaläšě*「彼らの少数」が 26 例、他 4 つは全て 200 例ずつ抽出。

3.2. 調査結果と考察

本節では、3.2.1 節で上位集合を表わす名詞句の格標示、3.2.2 節で定形動詞との数の一致に関する調査の結果を述べる。

3.2.1. 上位集合を表わす名詞句の格標示

調査の結果、上位集合を表わす名詞句は**奪格形が最も一般的で、次に主格形が多く、属格形は稀である**ことが分かった。調査結果を以下の表 2 に示す。

表 2：調査結果①

		奪格	属格	主格
<i>numayăšě</i>	多く	46	0	20
<i>čilayăšě</i>	かなり	65	1	19
<i>itlaraxăšě</i>	過半数	66	11	8
<i>saxalăšě</i>	少数	10	0	0
<i>xăšě+pěri</i>	一部	33	0	3
<i>kašniyě</i>	それぞれ	11	0	25

このことから、チュヴァシ語の部分構造で上位集合を表わす名詞句の基本形は奪格形であるといえる。一方、他の主なチュルク諸語の対応構造では属格も一般的であること（例：トルコ語 *onlar-in çoğ-u* [that-GEN many-3.POSS] 「彼らの多く」）、（多くは非生産的な形式とはいえ）代名詞化した限定詞に所有接辞が現れることから、チュヴァシ語の部分構造でもかつては属格所有構造がより一般的であった可能性がある。以下に、それぞれの格標示の例を 1 つずつ挙げる。

(3) Ачасенчен нумайăшě сывăраççě.

ača-senčen numay-ăšě sīvăr-aśšě

child-PL.ABL many-3.POSS sleep-PRS.3PL

「子供たちのうち多くは寝ている。」（奪格標示）

(4) Партизансен ытларaxăšě äна рабочи металлист пулě тенě.

partisan-sen itla-rax-ăšě äna raboči metallist pulě te-ně

partisan-PL.GEN excessive-COMP-3.POSS that.DAT/ACC ironworker MOD say-PRF

「パルチザンらの過半数は、彼を鉄工だろうと考えた。」（属格標示）

チュヴァシ語では文頭の主格名詞句は基本的に話題であるため、上位集合を表わす名詞句が主格形である場合はその部分が話題であると考えられる。このような場合に上位集合を表わす名詞句は、(5) のように代名詞化した限定詞とともに二重主語を構成する。チュヴァシ語において二重主語は、(5) や (6) のように後項が前項（話題）の一部であるものが観察される。

(5) *Ѕынсем нумайăшĕ таврăнчĕ.*

šin-sem-Ø numay-ăšĕ-Ø tavrăn-ĕ-ĕš
 person-PL-NOM many-3.POSS-NOM return-PST-3PL

「人々はその多くが帰った。」(主格標示)

(6) *Вĕсем пĕр пеккисем те пулнă, пĕр пек маррисем те пулнă.*

vĕsem-Ø pĕr pekk-i-sem-Ø=te pul-nă pĕr pek marr-i-sem-Ø=te pul-nă
 that.PL-NOM one like-NMLZ-PL-NOM=also be-PRF one like NEG-NMLZ-PL-NOM=also be-PRF

「それらは(互いに)似ているものも、似ていないものもあった。」

3.2.2. 定形動詞との数の一致

調査の結果、1) 上位集合を表わす名詞句が主格形の場合は専ら複数一致が起こること、2) それ以外の場合は代名詞化した限定詞が意味的に複数性の高いものであるほど複数一致の頻度が高いことが分かった。上位集合を表わす名詞句が主格形の場合の一致パターンの頻度を表3に、上位集合を表わす名詞句が現れていない場合および奪格形・属格形の場合の一致パターンの合計頻度を表4に示す(複数一致の割合は小数第2位を四捨五入)。

表3：調査結果②(主格形)

		単数一致	複数一致
<i>numayăšĕ</i>	多く	0	10
<i>ĉilayăšĕ</i>	かなり	0	8
<i>itlaraxăšĕ</i>	過半数	0	4
<i>saxalăšĕ</i>	少数	0	0
<i>xăšĕ+pĕri</i>	一部	0	1
<i>kašniyĕ</i>	それぞれ	1	8

表4：調査結果③(奪格形+属格形+名詞句なし)

		単数一致	複数一致	合計
<i>numayăšĕ</i>	多く	38	70 (64.8)	108
<i>ĉilayăšĕ</i>	かなり	53	61 (53.5)	114
<i>itlaraxăšĕ</i>	過半数	16	17 (51.5)	33
<i>saxalăšĕ</i>	少数	8	5 (38.5)	13
<i>xăšĕ+pĕri</i>	一部	94	27 (22.3)	121
<i>kašniyĕ</i>	それぞれ	66	12 (15.4)	78

上位集合を表わす名詞句は文法的に複数である。1) から、上位集合を表わす名詞句が主格形の場合は、それが定形動詞と一致する蓋然性が高いといえる。代名詞化した限定詞は一致に関与しない場合が多いと考えられ、一致しない場合はこれを副詞的要素とみなすこともできそうである。しかし、統一的

説明のためには一致しない場合も二重主語の後項とみなしたほうがよい。なぜなら、(7) のように単数一致をしている例では、文法的に単数である代名詞化した限定詞（もしくは上位集合を表わす主格名詞句を含む、代名詞化した限定詞を主要部とする部分構造全体）が一致に関与しており、よってそれを副詞的要素とみなすことはできないからである。

(7) Ла́ша ха́пхинчен лерелле священниксем кашнийё харпа́р хай килё те́лёнче юса́рĕ.

<i>laša</i>	<i>hapx-i-nčen</i>	<i>lere-lle</i>	<i>svjasčennik-sem-Ø</i>	<i>kašniy-e-Ø</i>
horse	gate-3.POSS-ABL	there-towards	priest-PL-NOM	each-3.POSS-NOM
<i>xarpār</i>	<i>xăy</i>	<i>kil-ě</i>	<i>těl-ě-nče</i>	<i>yusa-r-ě</i>
each	REFL.3SG	house-3.POSS	place-3.POSS-LOC	fix-PST-3SG

「馬の門から上の方は祭司たちがおのおの自分の家と向かい合っている所を修理した。」

次に、2) から、部分構造と定形動詞の間には「意味的一致 (semantic agreement)」(Corbett 2006) が起こりうるといえる。Corbett (2006: 155) によると、コントローラーの形に応じた一致が統語的一致 (例: the committee **has** decided) であるのに対し、コントローラーの意味に応じた一致は意味的一致 (例: the committee **have** decided) である。仮に統語的一致のみが起きると仮定した場合、上位集合を表わす斜格名詞句を含む部分構造が主語の節では、主要部である代名詞化した限定詞が文法的に単数であるため、必ず単数一致が起こらなければならない。しかし、(3) や表 4 から明らかなように、そのような場合でも複数一致が起こりうる。表 4 から、複数一致は代名詞化した限定詞の指示対象の人数・数量が多いほど、つまり主語が意味的に複数であると解釈されやすいものであるほど起こりやすいと言える。これは、複数一致が意味的一致であるとすることで説明できる。類似の現象は隣接する同系のタタール語にも見られる (菱山 2019)。

4. まとめと今後の課題

チュヴァシ語の部分構造において、1) 上位集合を表わす名詞句は奪格、属格、主格のいずれかで標示されうる、2) 定形動詞との一致では単数一致も複数一致も起こりうる。これら2つの現象について本研究では、コーパスを用いた定量的調査の結果をもとに以下の3点を主張した。

- ① 上位集合を表わす名詞句は奪格形が最も一般的で、次に主格形が多く、属格形は稀である。属格形は残存である可能性があり、上位集合を表わす名詞句が話題の場合は主格形となる。
- ② 上位集合を表わす名詞句が主格形の場合は専ら複数一致が起こる。よって、上位集合を表わす主格名詞句が現れる場合はそれが定形動詞と一致する蓋然性が高い。
- ③ それ以外の場合は、代名詞化した限定詞の意味的な複数性が高いほど複数一致の頻度が高い。よって、部分構造と定形動詞の間には意味的一致が起こりうる。

今後は、本研究で扱った6つ以外の代名詞化した限定詞についても調査を行う必要がある。また、数量詞に限定された単数名詞句 (例: *temiše šin* 「何人かの人」) が主語の場合も単数一致と複数一致の両方が見られるため、このようなものについて調査することも今後の課題である。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PL	plural	複数
ABL	ablative	奪格	PN	proper noun	固有名詞
ACC	accusative	対格	POSS	possessive	所有
COMP	comparative	比較	PRF	perfect	完了
DAT	dative	与格	PRS	present	現在
GEN	genitive	属格	PST	past	過去
LOC	locative	位格	REFL	reflexive	再帰
MOD	modality	モダリティ	SG	singular	単数
NEG	negative	否定	-		接辞境界
NMLZ	nominalizer	名詞化	=		接語境界
NOM	nominative	主格	+		複合語境界

参考文献

- Aydın, Ö. (2009) Agreement with partitive quantifiers in Turkish. *Essays on Turkish Linguistics: Proceedings of the 14th International Conference on Turkish Linguistics, August 6-8, 2008 (Turcologica)*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Corbett, G. G. (2006) *Agreement*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*, New York: Routledge
- 菱山湧人 (2019) 「タタール語における代名詞化した限定詞との一致について」『日本言語学会第 159 回大会予稿集』152-158.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press.

調査資料

Čávaš čělxin ikčělxellě šüpši [チュヴァシ語 2 言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2023/7/4]